

2011年度前期学生授業評価アンケート集計結果に対するコメント —大学院—

経済学研究科長 木村 周市朗

アンケート調査に対する大学院学生諸君の協力に感謝します。

当期の大学院全体の集計結果についてみると、日頃の授業活動に対して学生諸君からおおむね高い評価を得ることができたと考えています。

各評価項目のうち、高得点の諸項目からうかがえるように、一般に教員は授業時間を有効に活用し、学生諸君に授業への参加を積極的に促しつつ、全体として授業に対する教員の熱意を示すことによって、総合的にみて授業への高い評価につながったと推定することができます。

その背景として、とりわけ大学院では、いずれの授業も徹底した少人数教育がおこなわれており、学生と教員との間で不断に緊密な学問的交流が図られていることが、こうした評価に寄与しているものと思われます。

一方、全体としての高評価の中で、あえて相対的にはやや消極的な評価と位置づけられる項目に注目すると、そこからうかがえるのは、第1に、授業のレベルが必ずしも受講者全員にとって適切なものであったとは言いきれないこと、また第2に、「予習または復習をよくした」と肯定的に回答した割合は4人中3人であったこと、この2点です。

このうち前者については、学生の修得すべきレベルとして教員の側が求める授業内容が、受講するすべての学生を満足させることがはたしてありうるのだろうかという、解決の難しい問題を含んでいます。しかしそれでも、少人数教育による対面交流の利点を生かして、できるだけ授業の中で疑問点が解消され、そのテーマに対する関心が具体的に深まるように、教員と学生の双方が率直に語り合い、地道に努力を重ねることが期待されます。

また、後者については、大学院教育はあくまで学生諸君の自発性を基本としていますが、単位制度における教室外学修（予習・復習）の重要性に対する認識が学生・教員の双方でさらに高まるように、授業の中でさまざまな工夫がなされることが大切であると思われます。

われわれは今回の高い評価に満足するのではなく、こうした努力の積み重ねによって、大学院の授業内容が一層充実し、履修者の学修意欲に応え、さらにますますその意欲を喚起するものであってほしいと念願しています。

文学研究科長 小島 孝之

「総合的にこの授業を評価できる」の設問の平均値が 4.84 であることは、相当程度授業が学生の支持を得ている、もしくは満足度が高いと考えることができよう。

この総合評価において 1 や 2 の低い評価が皆無であることも、同じことの表れと見なせよう。

しかし、私見では、大学院の授業においては充分予想できる結果である。なぜならば、どの授業においても、受講学生数は数人の範囲にとどまり、教員の指導は一人一人にきめ細かく行われていると思われるからである。

「この授業のレベルはあなたにとって適切であった」という項目の平均値が全質問項目の中で最も低いが、それは、難し過ぎたのか、易し過ぎたのか、この結果だけからはどちらとも判断できない。全体の満足度との相関係数が 0.5 であるから、必ずしもレベルの問題と満足度との相関性も高くない。今後は個別の分析により改善をし、学生からさらに高い評価が得られるよう取り組んでいきたい。

社会イノベーション研究科長 手塚 公登

前期大学院の授業評価の結果は、ほとんどの項目で平均値が 4.5 以上で、きわめて高いレベルにあると思われる。ただ、ごく少数ではあるが、項目によってはきわめて低い評価をつけている学生もみられるので一層の改善の余地はある。大学院の授業は、少人数で行われ、自らの専門に近い科目を選択するので、総体的に高い評価が与えられるのは、ある意味当然のことかもしれないが、今後ともこうした高い評価が維持できるよう各教員が努力を継続していく必要があるだろう。